

吉蔵における「四調柔」について

菅野 博史

『法華遊意』には、四教（四調柔）について、

言^ハ四教^ニ者。方便品偈文明^ニ於四教^ニ。謂^ハ四調柔^ニ。一^ハ以^テ人天乘^ニ調柔^ニ。令^レ離^ニ三塗^ニ。次^ニ以^テ三乘^ニ調柔^ニ。令^レ離^ニ三界^ニ。此^ニ二調柔^ニ。令^レ離^ニ三界^ニ。惑^ニ也。三^ニ以^テ自教^ニ調柔^ニ。令^レ二乘人^ニ得^テ口自說^ニ大法^ニ。以^テ自^ニ知^ニ。教調伏^ニ其心^ニ。四^ニ以^テ他教^ニ調柔^ニ。諸^ノ仏菩薩^ノ為^レ其^ノ說^ニ大法^ニ。令^レ小^ノ入^ニ大^ニ。此^ニ二教^ニ使^ニ其^ノ離^ニ三界外小乘惑^ニ也。此^ニ四調柔^ニ。二乘人^ニ令^レ入^ニ一乘^ニ。為^ニ一乘之方便^ニ也。故^ニ信解品^ニ云^ニ。如^レ富長者^ニ。以^テ三方便力^ニ柔伏^ニ其心^ニ。乃^ニ教^ニ中大智^ニ也。〔大正三四・六四四下〕とある。これによれば、四調柔とは、人天乗・二乗・自教・他教の四教によつて二乗の人の機根を調柔することを原義とするが、そこから、二乗の人を調柔する四教そのものを四調柔と呼ぶ用法が生じたものと考えられる。この四調柔が一乗の方便と規定されていることについては後述する。また、四調柔の依文として、法華經の信解品の文が引用されているが、吉蔵の引用は、実は、「如富長者 知子志劣 以方便力 柔伏其心」（大正九・一八下）と「知樂小者 以方便力 調伏其心 乃教大智」（前同）との二文を合して作つたものである。この二文にある「調伏」と「柔伏」から、「調柔」という語が造られたことは容易に推測されるが、この漢訳の原語は、

nam（ケルン・南條本一八頁）で、家畜などを飼ひ馴らす、柔

順にするという意味である。ところで、羅什訳の法華經には、「調柔」という語が二箇所（大正九・二〇下と四五上）に出ていて、これに該当する原語はそれぞれ、su-danta, dāna（ケルン・南條本一四六頁と三三四頁）で、nam の過去受動分詞が用いられている。しかし、四調柔の調柔は状態より動作を示す語なので、調伏と柔伏より造語されたと考ええるほうが妥当であろう。

四調柔についての一往の理解が得られたので、『法華遊意』より以前の著作、『法華玄論』『法華義疏』によつて、四調柔の形成過程や思想的意義について考察しよう。

吉蔵は、『法華玄論』巻第一の如來の十種の大恩を明かす段（大正三四・三六七下―三六八上参照）や、巻第七の「信解品譬喻義」（前同・四一六上参照）において、釈尊の説法の順序を、華嚴經・人天教・二乗教・大品般若經・諸方等經・法華經と規定した。吉蔵は、厳密には、説時の順序を固定化することを否定しているので、上述の説時の順序は信解品の意による一往のものであるが、すでに、『法華玄論』において、華嚴經と法華經との中間を四種に分類する考えが確立していたことがわかる。また、四調柔の第三自教、第四他教の名称も、同巻第七（前同・四一七下）で解説されている。要するに、四調柔の思想的萌芽はみられるが、四教だけを取り出して何かを論じようとする考えは、まだみられない。

ところが、『法華義疏』には、四調柔という用語はみられないものの、内容的には『法華遊意』の四調柔と同じことが説かれている。すなわち、巻第七の信解品の釈には、

從^ニ華嚴^ニ以後依^ニ此品^ニ始終之意^ニ凡^ニ有^ニ四教^ニ。調^ニ伏^ニ廻^ニ入^ニ大之人^ニ。方得^ニ入^ニ於^ニ仏慧^ニ。言^ニ四教^ニ者。一冷水灑面即人天教。令^ニ

其^レ離^レ三塗之惡^ヲ。次^ニ屢^ニ子除^レ糞^ヲ。譬^ニ說^ニ二乘教^ヲ。令^ム離^レ凡夫煩惱^ヲ。三^ニ者付財密化^ヲ譬^ニ及陶練^ニ小心^ヲ。譬^ニ此^ニ一譬^ニ化^ニ彼^ニ一乘^ヲ。同^ニ令^ム離^レ三^ニ乘煩惱^ヲ。所^ニ以^テ但^ニ準^ニ此^ニ一譬^ニ者^ヲ。以^テ大^ニ法^ニ化^ニ小^ニ人^ヲ。凡^ニ有^ニ三門^ヲ。一^ニ者令^ム小^ニ人^ヲ說^ニ大^ニ化^ニ小^ニ人^ヲ。則^チ付財教^ヲ。名^ニ為^ニ自教^ヲ。二^ニ者令^ム大^ニ士^ヲ說^ニ大^ニ而化^ニ小^ニ人^ヲ。謂^ニ大品以後諸方等經^ヲ。名^ニ為^ニ他教^ヲ。一切^ニ大^ニ乘^ヲ中^ニ唯^ニ此^ニ二事^ヲ。故^ニ用^ニ斯^ニ二^ニ調^ニ其^ニ小^ニ心^ヲ。然^レ後得^レ悟^ニ。一^ニ乘^ヲ也。

(前同・五五二下)

とある。このように、四教によつて窮子(二乗の人の譬喩)の心を調伏して法華經に入らしめるのであるが、この四教が方便説であるかどうかが問われる。これに対して、吉藏は、「前之一教是方便教。故籍^ニ方便教^ヲ。悟^ニ入^ニ一^ニ乘^ヲ。則^チ以^テ方便教^ヲ為^ニ二^ニ乘^ヲ方便^ヲ也。後之二教並是大乘。即是真實教。但籍^ニ真實教^ヲ。悟^ニ入^ニ一^ニ乘^ヲ。故^ニ以^テ真實教^ヲ為^ニ下^ニ入^ニ法華^ニ之^ニ方便^ヲ也」(前同・五五二下―五五三上)と答えている。四教すべてが法華經に入るための巧みな手だてとしての方便であること、真實を明かしていないという意味での方便説は、人天教と二乗教にはあてはまるが、自教と他教は大乘であるから真實教であることを説いている(同趣旨の文は、五五七上にもある)。

しかし、この方便の語義を誤解して、大品や諸方等が法華より劣つた經であるとする考えに対して、吉藏は、「今明^ニ諸菩薩等^ヲ於^ニ三波若^ニ中^ニ皆^ニ已^ニ得^ニ悟^ニ。聲聞鈍根^ヲ。假^ニ三菩薩究竟之教^ヲ為^ニ得^ニ悟緣由^ヲ。故^ニ云^ニ三方便^ニ耳^ヲ。非^ニ是^ニ大品末^ニ究竟^ニ稱^ニ為^ニ三^ニ方便^ニ也」(前同・五五七上)と述べている。すなわち、大品の場合について、菩薩は大品において得悟するが、聲聞は得悟することができず、大品の教えをただ得悟の緣由とするのみであるから方便といわれるのである。したがつて、聲聞にとつてのみ大品は法華に入るための方便なのである。な

吉藏における「四調柔」について(菅野)

お、『法華義疏』においては、他の二箇所(卷第八の五七三中と五七四下参照)で四調柔について闡説している。

最後に、『法華統略』をみると、四調柔について、卷二(統藏一―四三―一・二六右下参照)に四調柔の名称のみを出し、卷四(前同・六一左下参照)には、四調柔を、凡夫の有見と二乗の空見を離れさせる働きをもつものとして把握している。また、四調柔は法華經に入るための方便(巧みな手だて)であることは既に述べたが、この四調柔の方便的側面をより鮮明にする概念が「四種密化」として説かれる。この四種密化は、法華經の三種顯教(法説・譬説・宿世因縁説の三周説)に相對していわれるのであるが、四種の教え(説人天乘・説二乘・命説大乘・為説大乘の四種で、内容的には四調柔と共通)が、聲聞を法華經に入るように、密かに化するものとして捉えられているのである。すなわち、

故寂滅道場已後。法華之前。用^ニ四種密化^ヲ。令^ム迴^ニ小^ニ入^ニ大^ヲ。(前同・三左上―下)

と。四調柔が四種密化と名づけられて、この密と法華經の顯とが明らかな對照を示すことによつて、四調柔が法華經のための準備段階であることをいつそう印象的に示していると評せよう。

ともあれ、四調柔は、華嚴より法華までの經教を四種に整理したものであり、それらの經教は、聲聞の機根を調柔し、法華經に入るための巧みな手だてである点において共通の働きをもっている。で、吉藏は、これらの經教を一括して四調柔として示したのである。三種法輪において、小乗ばかりでなく大乘も枝末法輪と規定されることは、華嚴より法華までの大小乗を四調柔として一括することと共通な思想に基づいているといえよう。(東京大学大学院)